

回復期における 不眠時不穏時PBPMの実践

～多職種チームで取り組んだプロトコルの運用を振り返って～

日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会
中国四国支部学術大会
シンポジウム 2 「回復期病棟における薬剤師業務を考える」

沼隈病院 薬剤課 課長 井上 卓治

日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会
中国四国支部学術大会

COI開示

発表者：井上卓治

演題発表内容に関連し、発表者らに開示すべき
COI関係にある企業などはありません。



社会医療法人社団 沼南会 沼隈病院

- 病床：118床
(一般44床、地域包括ケア16床、療養58床)
- 診療科：18科
- 沼隈病院職員数：203人
- 入院患者数：117人/日
- 外来患者数：155人/日



広島県福山市沼隈町



- 人口約1万7千人弱
- 高齢化率32.7% 地域の中核病院
- 法人として、病院の他、老健施設、介護事業を持ち、訪問診療も実施。

沼隈病院グループ (沼南会 ・ まり福祉会)

《在宅訪問事業》



訪問診療

まり訪問看護ステーション

まり訪問介護ステーション



《まり高齢者複合施設 山南》

まり介護付高齢者住宅 山南 36室

まりショートステイ 山南 30床

まりデイケア 山南 定員 50名

山南クリニック



《病院・医院》



常石医院

沼隈病院

118床



《在宅生活応援事業》



介護老人保健施設ぬまくま

入所 定員 60名

通所リハビリ 定員 65名

訪問リハビリ



《居宅介護支援事業》



まり居宅介護支援事業所



《入居事業》

GHぬまくま

まりホーム熊野

まりホーム内海



《在宅生活応援事業》



まりデイサービス内海

定員 35名



地域密着型
特別養護老人ホーム
まり沼隈





沼隈病院 薬剤課の紹介

【薬剤部】

- 薬剤師数 5人(常勤3人、非常勤0.87人)
- 調剤補助事務 1名
- 外来処方箋枚数 126枚/日
- 院外発行率 98%
- 病棟薬剤業務実施加算算定
一般病棟、療養病棟へ各1名配置
- 薬剤管理指導 278件/月
- 薬剤総合評価調整加算 16件/月
- 薬剤調整加算: 4件/月
- 退院時薬剤情報連携加算: 13件/月



回復期リハビリテーション（地域包括ケア病床）

急性期治療後、ADLの向上・維持を図り、在宅復帰を目指す

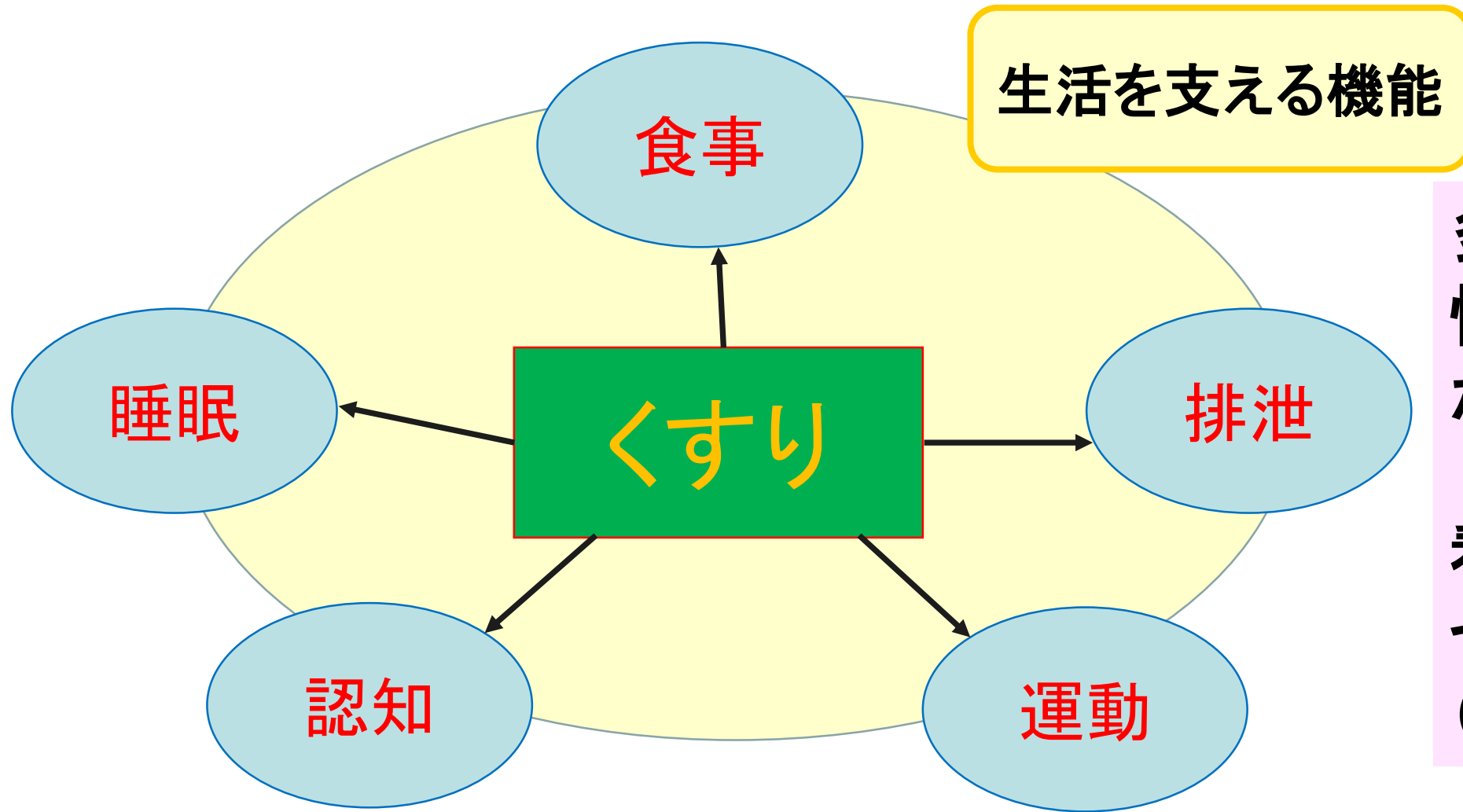
医療・治療の視点

生活・支援の視点

「薬剤がADLに与える影響」を考える（リハ薬剤）

「服薬継続支援」を考える（地域連携）

薬剤が影響を与えるADLとは？



多職種との
情報共有・連携
が重要

看護師・栄養士
セラピスト
(PT, OT, ST)

薬剤起因性老年症候群と主な原因薬剤

症 候	薬 剤
運動機能 ふらつき・転倒	降圧薬（特に中枢性降圧薬、 α 遮断薬、 β 遮断薬）、睡眠薬、抗不安薬、抗うつ薬、てんかん治療薬、抗精神病薬（フェノチアジン系）、パーキンソン病治療薬（抗コリン薬）、抗ヒスタミン薬（ H_2 受容体拮抗薬含む）、メマンチン
認知機能 記憶障害	降圧薬（中枢性降圧薬、 α 遮断薬、 β 遮断薬）、睡眠薬・抗不安薬（ベンゾジアゼピン）、抗うつ薬（三環系）、てんかん治療薬、抗精神病薬（フェノチアジン系）、パーキンソン病治療薬、抗ヒスタミン薬（ H_2 受容体拮抗薬含む）
認知機能 睡眠 せん妄	パーキンソン病治療薬、睡眠薬、抗不安薬、抗うつ薬（三環系）、抗ヒスタミン薬（ H_2 受容体拮抗薬含む）、降圧薬（中枢性降圧薬、 β 遮断薬）、ジギタリス、抗不整脈薬（リドカイン、メキシレチン）、気管支拡張薬（テオフィリン、アミノフィリン）、副腎皮質ステロイド
抑うつ	中枢性降圧薬、 β 遮断薬、抗ヒスタミン薬（ H_2 受容体拮抗薬含む）、抗精神病薬、抗甲状腺薬、副腎皮質ステロイド

症 候	薬 剤
食事 食欲低下	非ステロイド性抗炎症薬（NSAID）、アスピリン、緩下剤、抗不安薬、抗精神病薬、パーキンソン病治療薬（抗コリン薬）、選択的セロトニン再取り込み阻害薬（SSRI）、コリンエステラーゼ阻害薬、ビスホスホネート、ビグアナイド
排泄 便秘	睡眠薬・抗不安薬（ベンゾジアゼピン）、抗うつ薬（三環系）、過活動膀胱治療薬（ムスカリン受容体拮抗薬）、腸管鎮痙薬（アトロピン、ブチルスコポラミン）、抗ヒスタミン薬（ H_2 受容体拮抗薬含む）、 α グルコシダーゼ阻害薬、抗精神病薬（フェノチアジン系）、パーキンソン病治療薬（抗コリン薬）
排泄 排尿障害・ 尿失禁	抗うつ薬（三環系）、過活動膀胱治療薬（ムスカリン受容体拮抗薬）、腸管鎮痙薬（アトロピン、ブチルスコポラミン）、抗ヒスタミン薬（ H_2 受容体拮抗薬含む）、睡眠薬・抗不安薬（ベンゾジアゼピン）、抗精神病薬（フェノチアジン系）、トリヘキシフェニジル、 α 遮断薬、利尿薬

運動機能に影響を与える薬剤 ～転倒の誘発～

精神機能の低下

- ・眠気
- ・注意力の低下
- ・せん妄

運動機能の低下

- ・脱力
- ・筋緊張低下
- ・パーキンソン様症状
- ・血圧低下

認知機能に影響を与える薬剤

せん妄

ぼんやりとした状態となり、注意を集中できず考えがまとまらない、判断力が低下する、時間や場所が判らなくなるなどの状態。意識障害を伴うもの。

- 認知症の症状と類似している
せん妄→発症が急速で、可逆的
認知症→時間をかけて緩徐に進行していく
- 高齢者のせん妄は薬剤が原因のことも多い

効き方の違うふたつの睡眠薬

GABA受容体作動薬

↓
脳全体を鎮静させて
眠りをもたらす



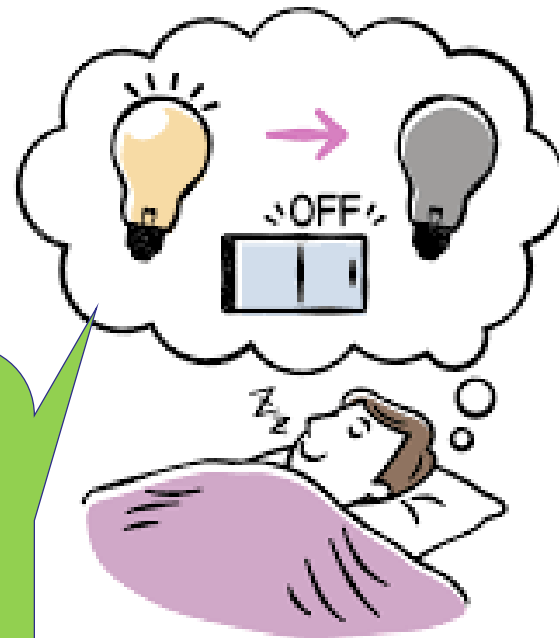
ブロチゾラム
フルニトラゼパム

ゾルピデム

エスゾピクロン

オレキシン受容体拮抗薬

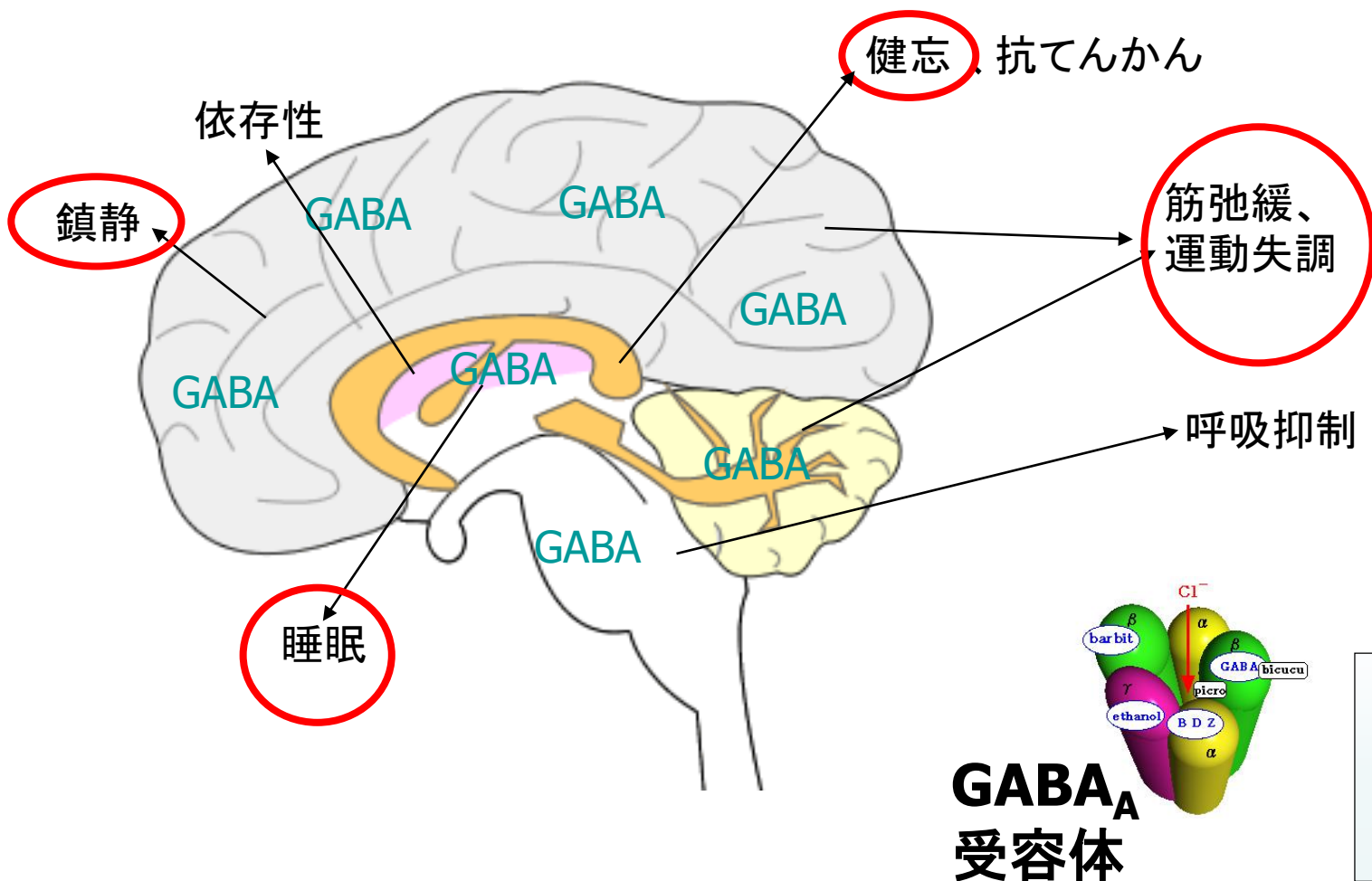
↓
亢進状態の覚醒を抑えて
眠りをもたらす



スボレキサント

レンボレキサント

ベンゾジアゼピン受容体作動薬（以下、BZD）



Lipowskiのせん妄発症要因の分類*より

準備因子(起こしやすい患者要因)

高齢者・認知症・脳血管疾患・アルコール多飲

直接因子(引き金になる因子)

身体疾患・手術

薬剤←ベンゾジアゼピン系は主要な因子

促進因子(促進・遷延化させる)

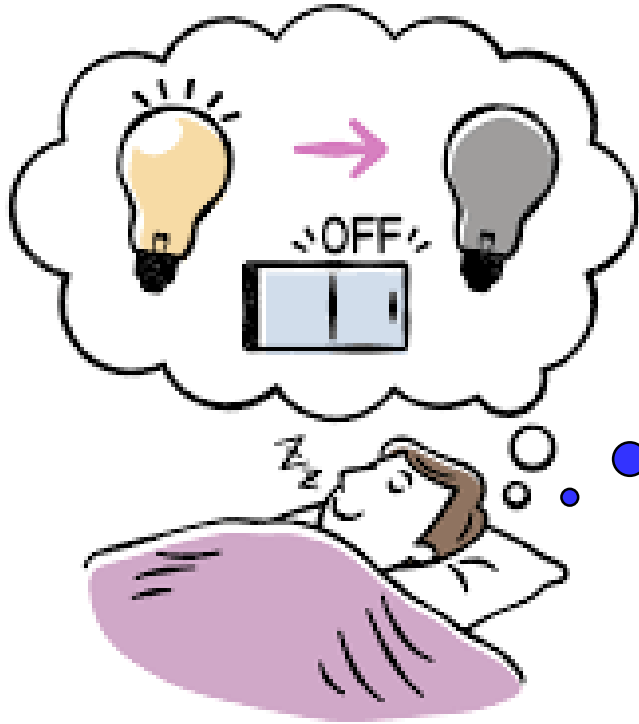
身体要因(疼痛・便秘・脱水など),

精神要因(不安抑鬱)など

「転倒」や「せん妄」の
リスクが高くなる

オレキシン受容体拮抗薬

亢進状態の覚醒を抑えて
眠りをもたらす



す、すげえ
ありがてえ
おやすみ

スボレキサント
レンボレキサント

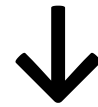
- 「オレキシン」は目を覚まそうとするホルモンだ。
- その「オレキシン」のスイッチをOffにしてみると、自然と寝れるんだぜ。

「転倒」や
「せん妄」の
リスクは少ない

病棟での薬剤師の役割

当時、**睡眠薬の適正使用**に課題があった。

高齢者の A D L (「運動」機能, 「認知」機能) に
影響を与えうるこれらの薬剤の適正使用を進めたい。



【目標】 病棟全体として適正な睡眠薬の使用ができる
達成のためのツールとして、**P B P M**の活用を提案

当院での不眠時不穏時の対応と問題点

- ①主治医が指示簿に不眠時,不穏時の頓服薬を指定
- ②その指示の中から夜間, 看護師が薬剤選択をする

医師

患者背景を十分考慮できていないBZDの使用が散見

看護師

- ・ どの薬剤を記入するか
個別の医師の判断による

- ・ 指示薬がないこともあり
- ・ 異なるBZDの複数併記

- ・ 夜間のため選択薬の判断は
個々の看護師の裁量となる

- ・ 投薬できず経過をみる
- ・ ハイリスクへのBZD使用

P B P M

(Protocol Based Pharmacotherapy Management)

医師と合意したプロトコールに従って 薬剤師が主体的に業務実施することを意味する

平成22年4月30日厚生労働省医政局長通知（医政発0430第1号）

「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」

薬剤師を積極的に活用することが可能な業務の記載のひとつ

「**薬剤の種類、投与量、投与方法、投与期間等の変更や検査のオーダーについて、医師・薬剤師等により事前に作成・合意されたプロトコールに基づき、専門的知見の活用を通じて、医師等と協同して実施すること**」

日本病院薬剤師会（2015年）

「PBPMの円滑な進め方と具体的実践事例」

PBPMは、**薬剤師の専門性の発揮**によって薬物治療の**質の向上や安全性の確保**，さらには**医師等の業務負担軽減**に寄与し，今後の**チーム医療の発展に大きく貢献**する

日本医療薬学会（2016年）

「PBPM導入マニュアル」

PBPMは、それぞれの医療機関で抱えている薬物治療における**課題を解決**するための有用な手段である

P B P M

(Protocol Based Pharmacotherapy Management)

薬剤師による主体的業務
専門性の発揮

医師らと事前に取り決めたプロトコル

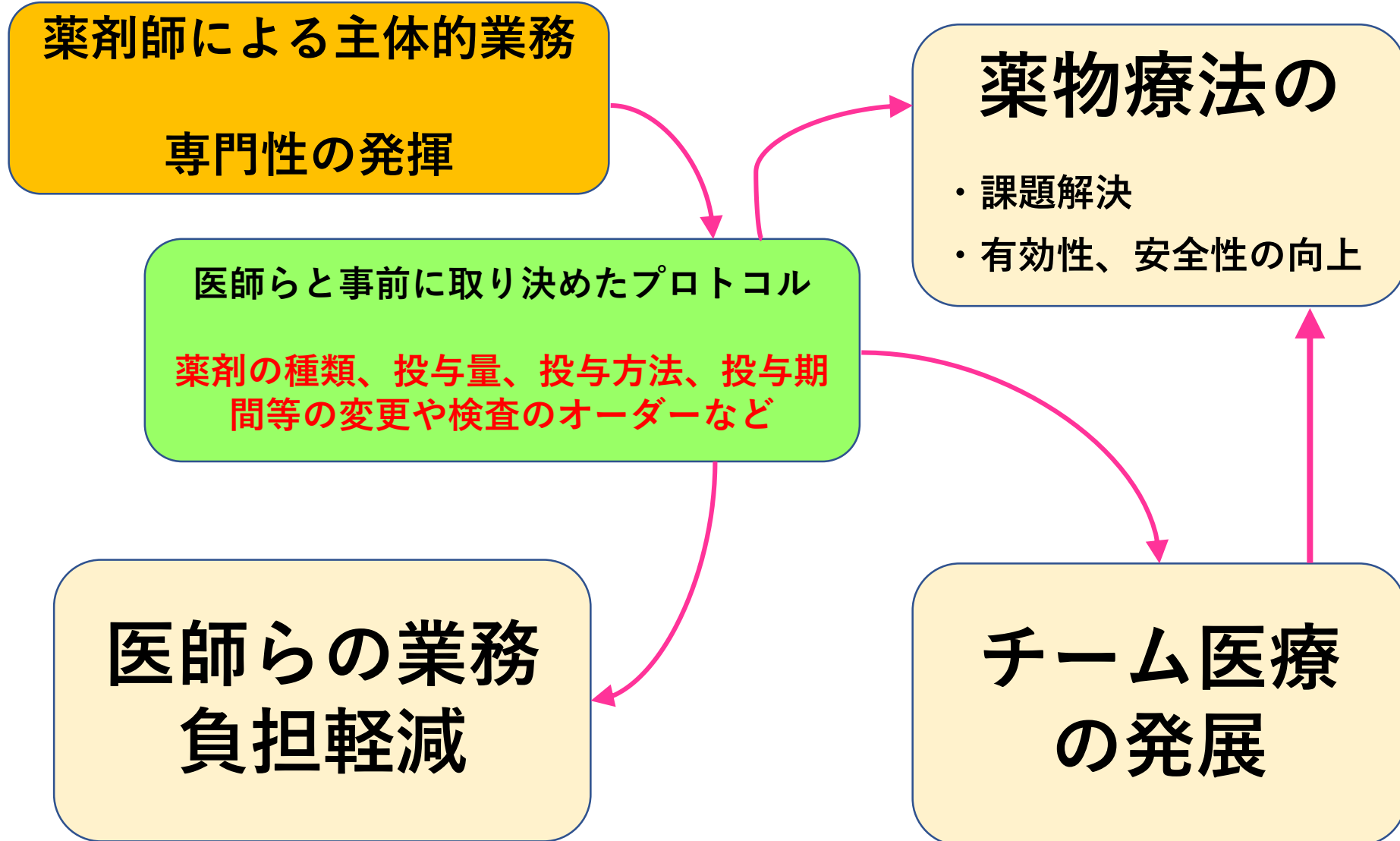
薬剤の種類、投与量、投与方法、投与期間等の変更や検査のオーダーなど

薬物療法の

- ・ 課題解決
- ・ 有効性、安全性の向上

医師らの業務
負担軽減

チーム医療
の発展



導入

Simple !

運用手順（2018年1月～9月）

①指示簿の入力

◆ 入院時に全ての患者に、**薬剤師**が指示簿に記入し、**医師**の承認。

②患者への投薬

◆ **看護師**が、患者状態を「不眠」か「不穏」で判断。

「不眠時」か「不穏時」のどちらか適切な指示簿を選択。

◆ **看護師**が、患者のせん妄リスク因子を評価。

「不眠時」には、通常指示とせん妄ハイリスク指示を使い分ける。

指示簿（2019年7月まで）

【不眠時】

ゾルピデム錠5mg・エスゾピクロン錠2mg

以下のせん妄リスク因子を複数保有

トラゾドン錠25mg 1錠 内服

せん妄リスク：

70歳以上、認知症、周術期、
脳梗塞・脳出血既往、せん妄既往

【不穏時】

・興奮を伴う場合

錠剤：リスペリドン錠1mg 1錠 内服

内服不可の時：

ハロペリドール注5mg1mL 筋注or点滴静注

※パーキンソン病は禁忌

・興奮を伴わない場合
(ベッド上ゴソゴソ・多弁)

錠剤：トラゾドン錠25mg 1錠 内服

運用手順（2018年10月～2019年7月）

改訂 1

①指示簿の入力（2018年1月～）

- ◆ 入院時に全ての患者に、薬剤師が指示簿に記入し、医師の承認。

← 変更なし。共通。

②患者への投薬（2018年1月～）

- ◆ 看護師が、患者状態を「不眠」か「不穏」で判断。
「不眠時」か「不穏時」のどちらか適切な指示簿を選択。
- ◆ **看護師が、患者のせん妄リスク因子を評価。**
「不眠時」には、通常指示とせん妄ハイリスク指示を使い分ける。

追加の手順



③投薬後の評価（2018年10月～）

- ◆ 翌朝、**病棟薬剤師**が夜間の**指示薬使用状況を調査**。
- ◆ 「不眠」「不穏」の選択の妥当性、せん妄リスクについて検討。
- ◆ **使用薬剤の適正を評価**。看護師と評価について話し合い、推奨薬を提案。
看護師は次の投薬時の薬剤選択の参考にする。
- ◆ **指示簿からの投薬が繰り返される場合、スボレキサントを定期処方追加可能。**
(※クラリスロマイシンなど禁忌薬の服用がある場合は不可)

ベンゾジアゼピン系の薬剤間の比較

『ルネスタ（エスゾピクロン）』が比較的安心

GABA_A受容体
サブユニット

α 1 サブユニット：
鎮静，前向き健忘，依存

α 2 サブユニット：
催眠，抗不安，筋弛緩

α 3 サブユニット：
睡眠，抗不安，抗うつ，筋弛緩

従来のベンゾジアゼピン系

α 1， 2， 3 の全てに全力

自然な「睡眠」というより「鎮静」の要素が強い。
「筋弛緩」や「依存」も起こりやすい。
→「転倒」や「せん妄」を起こしやすい。

改良されたベンゾジアゼピン系（ゾルピデム等）

α 1 への作用を強く、 α 2， α 3は弱い

α 1・・・「鎮静」や「健忘」「依存」が強い。
 α 2， α 3・・・「筋弛緩」作用が弱い。
「転倒」「せん妄」のリスクとしては??

「エスゾピクロン」

α 1の作用は弱く、 α 2と3の作用が強い。

「鎮静」ではなく、「催眠」効果。
「依存」も比較的少なくなっている。
「せん妄」を比較的起こしにくい。

①せん妄リスク評価と指示簿の入力

- 全患者の入院時に、**せん妄リスク因子の評価を薬剤師と看護師が協働実施。**
- せん妄リスクに合った指示簿を**一つ選択**、薬剤師が一次入力後、医師承認。

②患者への投薬

- ◆看護師が、患者状態を「不眠」か「不穏」で判断し、患者に投薬。

③投薬後の評価

- ◆翌朝、病棟薬剤師が夜間の指示薬使用状況を調査。
- ◆「不眠」「不穏」の選択の妥当性、せん妄リスクについて再度検討。
- ◆使用薬剤の適正を評価。看護師と評価について話し合い、推奨薬を提案。看護師は次の投薬時の薬剤選択の参考にする。
- ◆指示簿からの投薬が繰り返される場合、SUVを定期処方として追加可能。（※クラリスロマイシンなど禁忌薬の服用がある場合は不可）

指示簿（2019年8月～2021年5月）

【不眠時】 適切な一つを選択

①せん妄リスクなし

エスゾピクロン錠2mg, ゾルピデム錠5mg

②せん妄ハイリスク・糖尿病なし

トラゾドン錠25mg, クエチアピン錠25mg

③せん妄ハイリスク・糖尿病あり

トラゾドン錠25mg, エスゾピクロン錠2mg

※TRZは効果不十分時、25mg追加投与可

【不穏時】

・興奮を伴う場合

注射：HPD注5mg1mL 筋注or点滴静注

※パーキンソン病の場合は除外

内用液：RPD内用液1mg/1mL 内服

錠剤：RPD錠1mg 1錠 内服

・興奮を伴わない場合 (ベッド上ゴソゴソ・多弁)

錠剤：TRZ錠25mg 1錠 内服

当院における不眠不穏時PBPM導入から発展の流れ

改訂 3

2021/6/1～： **レンボレキサント主体指示簿へ改定**

これまでの指示簿の薬剤・・・それぞれ汎用するには問題点あり

BZDである『エスゾピクロン』を含めた指示簿を用いて、使い分けが必要であった

トラゾドン：

作用発現が遅く入眠効果に不満がある症例もあった。

抗精神病薬：

不穏が強い場合などに有効だが、通常の不眠には適応しにくい。

ラメルテオン：

作用発現に2週間程度の連日服用が必要で、指示簿に採用せず。

スボレキサント：

最高血中濃度到達：1～3時間 半減期 10時間

夜間投薬するには看護師が併用薬を確実に確認する必要あり。

当院における不眠不穏時PBPM導入から発展の流れ

2021/6/1～：レンボレキサント主体指示簿へ改定

2020年7月から発売の『レンボレキサント』

最高血中濃度到達時間が1時間

α 相半減期が4時間程度

→作用発現が早く持ち越しも少ない特徴。

BZDに代わる低リスク薬剤に最適と考えた。

2021年5月～長期処方解禁を受け、

2021年6月から、指示簿の薬剤を大幅に改定。

指示簿（2021年6月以降）

※事前に1名医師の患者で試行後，全体へ導入

【不眠時】 適切な一つを選択

せん妄リスク(-) 1st：レンボレキサント※1， 2nd：エスゾピクロン2mg

せん妄リスク(+) 1st：レンボレキサント※1， 2nd：トラゾドン25mg※2

※1 オレキシン受容体拮抗薬の服用

あり→2.5mg

なし→5mg<1時間後不十分なら2.5mg追加可能(2回まで)>

※2 効果判定によりトラゾドンの1回量25mg→50mgに増量可

指示簿（2021年6月以降）

※事前に1名医師の患者で試行後，全体へ導入

【不穏時】適切な一つを選択

興奮強い,幻覚等あり※3

1st：(糖尿病あり)ペロスピロン錠4mg （糖尿病なし）クエチアピン錠25mg

2nd：レンボレキサント※2

ゴソゴソ,独語など

1st：レンボレキサント錠※1， 2nd：トラゾドン錠25mg※2

経口不可の場合のみ(パーキンソン病禁忌)

ハロペリドール注2mg±ヒドロキシジン注25mg

※3 効果判定により

1)ペロスピロンの1回量を4mg→8mgに増量

±2)主治医相談後,リスペリドン1mg(内用液,錠)の指示追加

実施手順（2021年6月以降）

指示簿からの投薬が続く場合の手順の一部変更

- オレキシン受容体拮抗薬を定期処方開始可能。
➡薬剤師による代行入力後、医師に報告。

1st：レンボレキサント錠5mg

2nd：スボレキサント錠15mg(中途覚醒がある場合)

※ただし、併用禁忌薬剤の有無を確認して開始する。

- オレキシン受容体拮抗薬以外の薬剤（抗精神病薬、鎮静系抗うつ薬など）の定期処方開始が適切と判断した場合
➡薬剤師より、医師に提案する。

プロトコル導入と改定の成果

• BZD使用回数が減少

2018年1月～2019年7月：81.7%

2019年8月～2021年5月：51.8%

2021年6月～2022年3月：0.5%

チーム連携の推進



A/D/Lに影響する
薬剤の減少

• 薬剤投与後の「不穏」が減少

2018年1月～2019年7月：15.6%

2019年8月～2021年5月：10.8%

2021年6月～2022年3月：??

最大の成果は新たなチーム連携の構築

多職種が関わる業務手順をプロトコルの形にし
そのプロトコルの課題を明確化しながら
新たな手順への発展をしていった

➡チーム医療の形を(よい意味で)変容していった

2018/10月～

看護師へ薬剤特性を踏まえた適正な選択の
情報共有をする手順が日常業務に定着

2019/8月～

薬剤師と看護師が協働で入院時に
せん妄リスクを評価する手順へと改善

病棟業務における定期処方への介入

病棟看護師からの相談からの介入

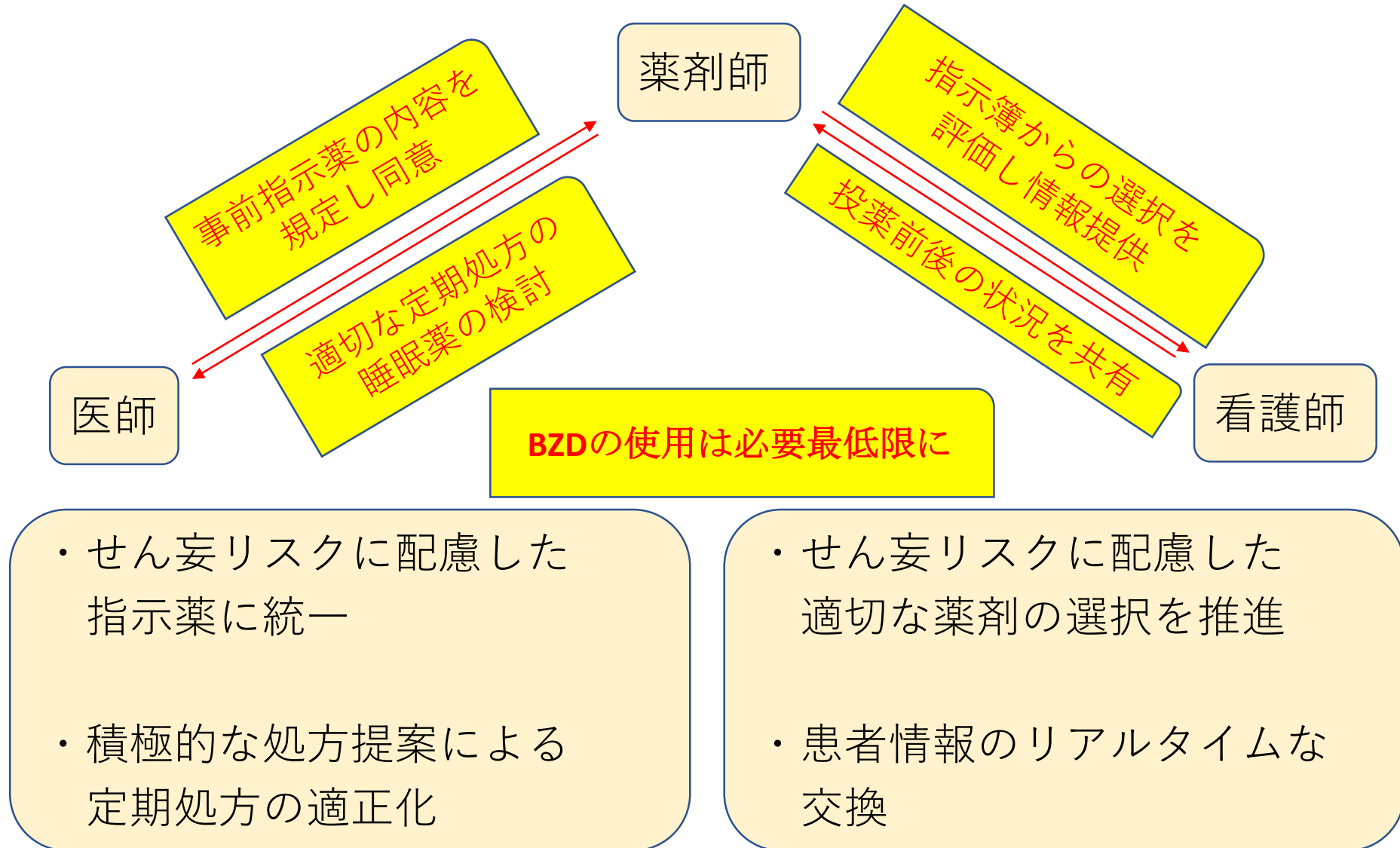
(認知症やせん妄などで連日の不眠・不穏に困った際)

- 指示簿からの選択薬の助言・指導
- 指示簿薬剤を使用後の効果判定を基に定期処方への介入
(ベンゾジアゼピン系薬剤の減量～中止, 他の有効薬剤の定期追加)
- プロトコルの流れに沿って、各スタッフ負担なく 自然に介入できる

入院時せん妄リスク評価時からの介入

- 特にせん妄リスクが高い周術期では介入が有効
- 入院時から積極的に、ベンゾジアゼピン系薬剤の減量～中止を提案
(ラメルテオンやレンボレキサント, トラゾドンなどを併用しつつ)

薬剤師を含めた連携の形を模索



P B P M

(Protocol Based Pharmacotherapy Management)

薬剤師による主体的業務
専門性の発揮

医師らと事前に取り決めたプロトコル

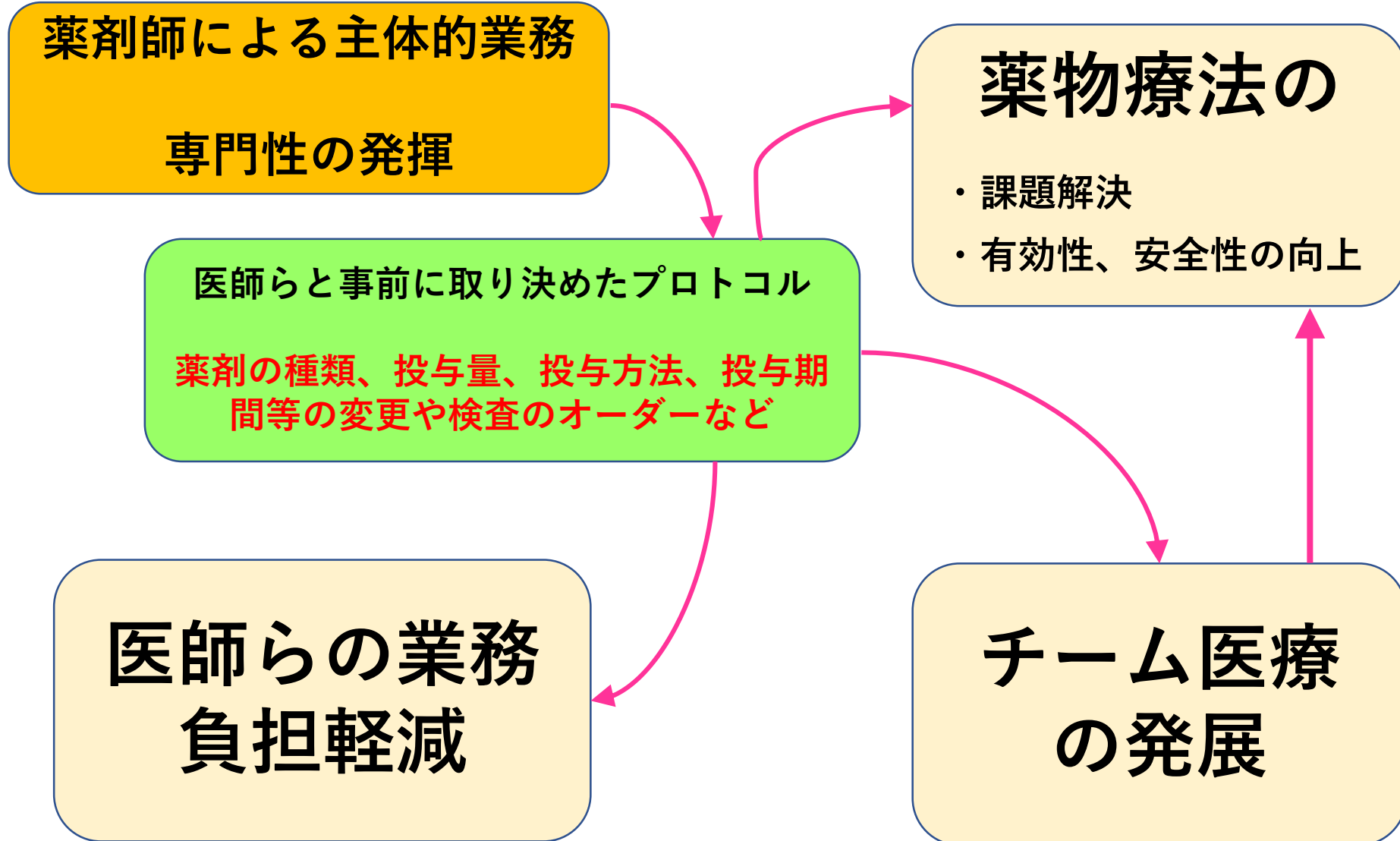
薬剤の種類、投与量、投与方法、投与期間等の変更や検査のオーダーなど

薬物療法の

- ・ 課題解決
- ・ 有効性、安全性の向上

医師らの業務
負担軽減

チーム医療
の発展



処方適正化後のフォローが大切

- ◆ こういった活動もきちんとしたアフターフォローあって活きてくる
- ◆ かかりつけ医に戻られたのちに、処方変更内容が情報提供されず、入院前の処方に戻ってしまうケースがある。（再入院した際発覚したり・・・）。

誰が誰に処方変更についての情報提供を書くのか？

- ◆ 確実に情報が伝達される方法を試行錯誤（2015年から徐々に）
- ◆ 2017年度～**かかりつけ医**への**診療情報提供書**に介入
「**処方内容**」欄→**薬剤師が確認し、修正・記入する**
その**備考欄**に**変更経緯など特別伝達したいことは個別に記載**
- ◆ 2020年度～**調剤薬局**への**薬剤管理サマリー**のFAXを開始

住み慣れた地域へ帰るとき一途切れのない情報提供を目指して

かかりつけ医への情報提供

診療情報提供書	
紹介先医療機関 診療科	薬剤師が処方内容の確認と 処方変更の経緯を記載
紹介元医療機関 〒720-0402 広島県福山市沼隈町中山南469-3 TEL 084-988-1888 FAX 084-988-1119 社会医療法人社団 沼南会 沼隈病院	待史 令和4年8月31日
処方内容	トラゼンタ錠5mg 1錠 ・・・1日1回朝食後 シルニジピン錠10mg「サワイ」(先:7レック) 1錠 ・・・1日1回朝食後 〔腎〕20mg ファモチジンD錠「サワイ」 1錠 ・・・1日1回朝食後 Rp-4 ベタニス錠50mg 1錠 ・・・1日1回朝食後 メトホルミン塩酸塩錠250mgMT「TE」(先:メグミット) 1錠 ・・・1日2回朝夕食後 トラゾドン塩酸塩錠25mg「アメル」(先:デジレム) 1錠 ・・・1日1回ねる前 酸化マグネシウム錠330mg「ケンエー」(マゲミット) 1錠 ・・・1日2回朝夕食後
患者氏名	備考 入院中の処方変更について 薬局井上
患者住所	お世話になります。 入院中の処方変更等、何点かございますので情報提供いたします。
電話番号	まず、睡眠薬について、貴院で処方されていたゾルピデムは、眠前ではなく中途覚醒時に服用していた(服薬なしで入眠はできていた)とのことで、また中途覚醒もほぼ毎日あるとのことで、また熟睡感も少ないとのことで、そこでトラゾドンを追加し、中途覚醒もなく良眠できるようになっており、ゾルピデムの服用は不要となっています。
持参薬	また、低血糖も何度か起こされ、食前血糖が70～90台で推移していたので、シュアポストから低血糖リスクの低いメトホルミンに変更して経過をみています。その後、低血糖もなく血糖コントロール良好で推移しています。
上級医	また、便秘に対して、酸化マグネシウム追加して、排便が良好です。
傷病	以上、情報提供でした。 今後ともよろしくお願いいたします。

調剤薬局への情報提供

薬剤管理サマリー		作成日	2022年8月31日
患者氏名	御待史	様	様の退院時処方・薬学的管理事項について連絡申し上げます。
生年月日	昭和12年2月13日	85歳	性別 女 身長 133.9 cm 体重 30.7 kg
入院期間	2022/7/25	～	2022/8/31 37日間 担当医 橋谷 興
基本情報	該当薬剤	発現時期	発現時の状況等 (検査値動向含む)
禁忌薬	☒ なし ☐ あり		
アレルギー歴	☒ なし ☐ あり		
副作用歴	☒ なし ☐ あり		
腎機能	SCr 0.5 mg/dL eGFR 80,232 mL/min/1.73m ²	体表面積 (DuBois式) 1.072 m ²	
その他	別紙あり 処方医機関: ほそや内科クリニック	☒ 別紙あり 退院処方に薬情添付 ☐ なし ☐ あり	
入院時処方	トラゼンタ錠5mg 1錠 1日1回朝食後 シルニジピン錠10mg 1錠 1日1回朝食後 20mg ファモチジンD錠 1錠 1日1回朝食後 アメル錠 1錠 1日1回朝食後 トラゾドン錠25mg 1錠 1日1回ねる前 ケンエー錠 1錠 1日1回ねる前	退院時処方	トラゼンタ錠5mg 1錠 1日1回朝食後 シルニジピン錠10mg 1錠 1日1回朝食後 20mg ファモチジンD錠 1錠 1日1回朝食後 アメル錠50mg 1錠 1日1回朝食後 トラゾドン錠250mgMT 2錠 1日2回朝夕食後 (新規) トラゾドン錠25mg 1錠 1日1回ねる前 (新規) 酸化マグネシウム錠330mg 2錠 1日2回朝夕食後 (新規)
※この内容を記載すること (問診票、薬剤の評価、医師の処方指示等/入院中の薬剤の追加、減量、中止で伝えたい内容)			
形状性腺機能低下症にて入院され、人工股関節置換術後リハビリをして、自宅に退院となりました。この度の入院中の処方変更等があります。			
トラゾドン、トラゾドン、ゾルピデム、採用薬に切り替え)ア・ロキソニン→ファモチジン、ハ・オール→ハ・タス			
元々処方されていたゾルピデムは、眠前ではなく中途覚醒時に服用していた(服薬なしで入眠はできていた)とのことで、また中途覚醒もほぼ毎日あるとのことで、また熟睡感も少ないとのことで、そこでトラゾドンを追加し、中途覚醒もなく良眠できるようになっており、ゾルピデムの服用は不要となっています。			
起こされ、食前血糖が70～90台で推移していたので、シュアポストから低血糖リスクの低いメトホルミンに変更して経過をみています。その後、低血糖もなく血糖コントロール良好で推移しています。			
酸化マグネシウム追加して、排便良好です。			
今後ともよろしくお願いいたします。			
退院時処方	ほそや内科クリニック 当院退院時21日分持たせています。これがないままに受診されます。	情報	9月21日まで処方しています。家におよそ50日分の入院前処方の残薬があるはずです。
記薬剤師までお問い合わせください。			
沼隈病院		〒720-0832 広島県福山市沼隈町469-3 TEL 084-988-1888 FAX 084-988-1119	薬剤師 井上 卓治

Take Home Message

- 回復期で重要なADLの維持・向上には多職種の見点が必要
- PBPMの活用は、多職種連携の推進に役立ち、それぞれの職種の負担を増やすことなく、スムーズな連携ができる。
- その結果、患者ADLへのよいアプローチをチーム医療で取り組む原動力にすることができる。
- 退院後の情報共有・連携も重要であり、診療情報提供書と薬剤管理サマリーの活用が望まれる。

ご清聴ありがとうございました



社会医療法人社団 沼南会

沼隈病院

〒720-0402 広島県福山市沼隈町中山南469-3

TEL: [084-988-1888](tel:084-988-1888) FAX: 084-988-1119